

大学人としての半生を振り返って

鈴木啓三

昭和30年3月、わが国の最北端に在る稚内高校を卒業して、同年4月、専修大学商経学部経済学科入学、昭和34年3月同学部を卒業して半世紀余の歳月が経った。

当時は国内の航空便はなく、移動はもっぱら蒸気機関車と連絡船のみであった。したがって、故郷を発って上野到着まで2日間の長旅であった。上野駅に着いた時は蒸気機関車の煙で顔が真っ黒となっていた。

大学生活

大いなる希望を抱いて入学した専修大学の生田校舎は想像を絶するものであった、日本電気生田研究所跡（旧軍事工場跡）、うなぎの寝床のような細長い工場の建物をそのまま教室に置き換えた状態であった。雨が降れば雨漏り、風が吹けば土ほこりが立ち、おまけに扉はバタバタ音立てる。そんな状況でも学生らはあまり文句も言わず黙々と講義を聞いていた。主な運動部（野球部、卓球部、ボクシング部、陸上部、馬術部、レスリング部など）は野球場の横に粗末な掘っ立て小屋形式の体育寮を住处とした。食料が満足でない時代にも拘らず、みんなはつらつと練習に試合にと頑張った当時を懐かしく想い出している。

野球部が常勝野球部は常に優勝争いしていたお陰で校歌は神宮の杜で自然に覚えてしまった。その他にも卓球、スケート、馬術、レスリングなど強いクラブの選手は、世界選手権大会に参加するため米ドルを準備する必要があった。当時の正規レートは1ドル360円（公定価格）で、中々手に入らなかったために400円以上の闇ドルを買い集め世界選手権大会に参加した。思い出しても大変な金額であり、両親には今でも親不孝をしたと謝罪の気持ちでいっぱいである。

レスリングに邁進

高校時代には柔道二段を取得したので、大学へ入学したら柔道をやろうと思っていた。

しかし、当時柔道は、世界で公式大会は禁止されていた。しかし、レスリングはオリンピックの種目であったために柔道をやっていた多くの者がレスリングへ転向した。私もその内の一人となった。

猛練習の甲斐あって一年生の秋、関東大学新人選手権大会フリースタイル・ウエルター級「現在は74キロ級」優勝、二年生では国体で同級優勝、三年生では全日本選手権に優勝し念願の世界選手権代表のキップを手中にした。当時、体育部長であった相馬勝夫先生（後に学長、総長）に、「終戦後はじめての全日本チャンピオンだね、よくやった。まあ、やればできるってことだな、おい、今後もしっかりやりたまえ」と歯切れのいい江戸っ子弁で褒められた。この時、激励された感動がモチベーションとなり、私の道が決定されたように述懐する。

世界選手権大会へ

昭和33年の春、日の丸を胸につけナショナル・チームの一員としてブルガリア（ソフィア市）で開催された世界選手権大会に向けプロペラのフランス機で羽田を発つ。途中、マニラ、サイゴン、ニューデリーなど各国の空港で2～3泊しながらアテネまで10日間以上の長い飛行機の旅だった。アテネから汽車でソフィアに着いた時は、全員疲労困憊の状態であった。美しい都ソフィアでは、参加国の中では最も遠い国から来たということで、大変歓迎された。しかし、当時のブルガリアは社会主義国家建設途上であり国民は希望に燃えていると思われていたが、私の眼に映った国民の姿は何か一様に暗く疲れた様子であった。その時の黙々と働く姿は失望の感じに映った。試合は敢闘のかいも虚しく4回戦で敗退する。その記憶は痛恨事として、いまだに私の脳裏に生生しくあるから不思議だ。負けたことよりレスリング競技の奥の深さを知らなかった悔しさ、また、関東大学リーグ戦をクラブの仲間と一緒に戦うことが出来なかったことに対して、後ろ髪を引かれる思いで羽田を発ったという申し訳なさなどを述懐した。

卒業～レスリング指導の道へ

昭和34年、泥まみれ、汗まみれになり勉強とレスリングの両立で4年間を過ごした思い出の多い生田キャンパスから巣立った。我々ヒナ鳥を待ち受けていたのは厳しい経済事情にあえぐ社会であった。右往左往しつつ恐る恐る社会にとけこんでいった。しかし、学生時代、古代ギリシャ人たちの構築した偉大な文化遺産を目前にして脚をふるわせたアテネでの思い出、わけても、古代オリンピックの遺跡は、痛烈に私の脳裏に焼きついていてきた。以来、オリンピックという人類の創造した祭典を、あたかも自分の心の故郷のような錯覚を伴い、強く意識するに至ったのである。

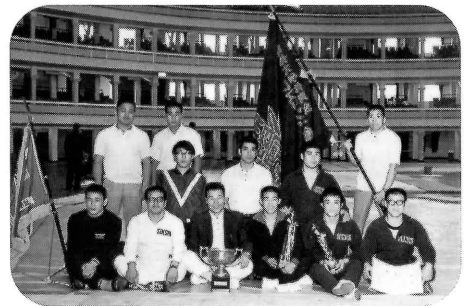
昭和39年、東京オリンピックを肌で体験しレスリングに対する情熱が益々燃えたぎる

思いとなった。昭和40年、母校の監督を拝命。体育の授業を担当させて頂きながら強化研究に一生懸命取り組んだ。ときには科学的に、スパルタ的に、またときには浪花節的に、あらゆる趣向、方法を凝らし、総花的な強化策を私なりに研究、実行した。つらくもあれば楽しくもあった。東京オリンピック出場の夢破れた沢内敏行君が故郷に帰り母校（八戸工業高校）の指導にあたった。懸命な指導が実り5年目で日本一のチームに育成した指導力は見事であった。その中から特に優秀な選手を多数、私の下に送ってくれた。それらの選手が主力となり、各大学の学園紛争も収まった年、じつに創部33年目、私たちが夢にまで見た日本一の美酒を飲むことが出来た。ついで、46年も勝利を手中にし、ふたたび溜飲を下げる喜びを得た。早稲田大学、慶応大学、明治大学、中央大学、日本大学などの伝統校をことごとく粉碎、日本一の座についた気分は、ひとしおで、私の我がままを許してくれた大学の関係者をはじめOB諸兄、選手諸君に感謝している。

また、そんな苦勞をともした選手の中から、世界的に雄飛してくれる者が相次いで輩出した。金子正明（メキシコ）、加藤喜代美（ミュンヘン）が金メダルを獲得、工藤章（モントリオール）、斉藤育造（ロサンゼルス）が銅メダルを獲得、その他にも阿部巨史、吉田光雄、馳浩、中西学、秋山準のような名選手が続々出て、母校のレスリング部の黄金時代を築いてくれた。監督冥利を存分に味あわせて頂いた。さらに、私と一緒に18年間レスリング部の良き指導をしてくれた松浪健四郎君と教え子でロサンゼルス・オリンピック馳浩君（文部科学省副大臣）が衆議院議員となり、政治の世界から我々スポーツを応援してくれている。また、馳浩君は現在レスリング部の監督として学生の指導にも当たってくれている。この様に優秀な人材を輩出できたことをいつも誇りに思っている。思い起こせば、母校のユニホームを誇りに戦った学生時代から、あっという間に半世紀余りが過ぎ去った。健康で定年を迎えられたことに感謝し、母校の益々のご発展を祈念申し上げる。



昭和44年6月1日
東日本レスリングリーグ戦優勝（創部初優勝）



昭和44年6月1日
東日本レスリングリーグ戦優勝（創部初優勝）



1972年
ミュンヘンオリンピック代表
八田一朗会長
猪狩則男理事長
鈴木啓三監督
柳田選手・57kg 金メダル
加藤選手・52kg 金メダル（専大卒）



最近のレスリング場にて
馳 監督
佐藤コーチ
久木留コーチ